

「天の国のたとえ」 —マタイによる福音書講解説教 63—

詩篇 第104篇 10~12節
マタイによる福音書 第13章 31~35節

説教 岡村 恒牧師

『天国とはこういうものだ』と主イエス・キリストは、繰り返したとえ話をを用いてお語りになりました。やがて終わりの日に完成する神の国がどういふものか私たちは思い浮かべ、その中に自分自身を発見することになります。代々のキリスト教会は、世の終わりを待ち望む終末聖日を迎え、来週の待降節(アドヴェント)になると教会の新年を迎えて、天国をいよいよ力強く待ち望みます。

マタイによる福音書には、天国のたとえが13も出てきますが、この13章だけで7つが語られ、主イエスの熱い思いが伝わってきます。普通、たとえ話は物事を分かり易くするために語られます。ところが主イエスのたとえ話は私たちを立ち止まらせ、つまずかせます。

目にとまらないような小さな種が、大きな木になる。ごくわずかなパン種が大きなパン全体を膨らませる。こういう話は当時、誰もがよく知っている話でした。ところが主イエスの話は、あり得ない話でした。当時、畑には同じ種類の作物だけを蒔きました。ユダヤ人は汚れを忌み嫌う民族です。何か他のものが混ざってしまうことを嫌います。小さな一粒の種が、大きな影を作って他の作物の生長を妨げ、そこに止まる鳥が畑を荒らしてしまうようなことは避けます。毒麦のたとえ話は、夜のうちに敵がわざわざ来て麦畑に毒麦を混ぜてしまう、という話でした。作物を植えた畑に、からし種などまいてはならないのに、それが大きな木になるまで成長する、と言うのです。

また、ある女が三斗の粉にパン種を混ぜる、ということもあり得ない話です。小麦約40リットル分、一度に焼くことができる最大量、150人分の食料だと言われます。パン種はしばしば悪いものにたとえられました。パリサイ人のパン種、といった言い方があります。出エジプトの物語では、わざわざパン種を除いてパンを焼くように、と神は指示なさいました。混ざりもののない純粋な粉だけのパンを用意することが大切だったのです。

当時は、乾燥イースト菌などありませんから、パン種を入れたものはすさまじい臭いがしただろうと言われます。家全体に発酵臭が充満します。しかもこれだけ大量のパン粉を用意したら、どんな臭いがしたでしょう。こんなことは誰もしないことだったのです。

弟子たちには、このたとえ話、神の国の奥義が分かりませんでした。簡単そうな話なのに、あり得ない話だったからです。神がペールを取り除いて下さらなければ真実を見ることができないのが奥義です。からし種やパン種のたとえ話はいずれもあり得ない話です。そして実はこれが、私たちに神の国の奥義を明らかにします。

私たちは誰もが、神の国に入ることなどあり得ない者です。神を神として拝むことをせず、自分の命、自分の人生をまるで自分自身のものであるかのように思い違いをし、自分で支配できると思い込んでしまいます。その結果、この地上にはいつでも憎しみと争いが満ち、神がお創りになったものを私たちは破壊して生きています。聖書は、私たちがどれほど神から遠く離れた存在であるかを明らかにします。畑に蒔かれるはずのないもの、家の中のどこにも居場所がないもの、それが私たちなのです。

クリスマスが来るたびに、主イエスが地上に来て下さったことの深い意味について、私たちは思い巡らします。神のひとり子、神と等しいお方が人間となり、私たち同じ地上の生活を歩み、味わう必要のない痛みと苦しみ、絶望までも味わって下さった。こんなことは起こってはならないことです。しかしその全てが、私たちのためだったと、聖書は語ります。

神の国と無関係な私たちが神の国に迎え入れられ、枝を張っておおきな木になるまで成長する。そこに居るはずのないものが、家のただ中に置かれ、全体を膨らませてしまう。こんな、あり得ないことが起こるのが天の国だ、と主イエスは言われたのです。

そんなことを神がなさるはずがない。それがクリスマスの出来事です。あの十字架の出来事です。ただ主イエス・キリストの贖いによって赦されざる者が赦され、神の国と無縁な者が神の子とされる。これが神の国の福音、良い知らせです。死と滅びだけがふさわしい罪人である私たちが、ただ神の憐れみによって「私の子」と神に呼ばれてしまうのです。

主イエスは、私たちを天の国に迎え入れるために来て下さった救い主です。このお方の言葉、救いの約束が、私たちに命を与え、天の国に迎え入れて下さる天の国の奥義なのです。

(記 岡村 恒)